



## 京魚荷飛脚について

藤村潤一郎

京魚荷飛脚については、大正二年刊「大阪市史」第一に「<sup>(1)</sup>京大阪通路魚荷飛脚七名あり。魚荷飛脚屋は魚荷以外の運搬をも掌り、賃銀は一定せずと雖も、大略書狀一通につき片便十文、返事取十五文、狀箱は大小に応じ荷物は重量百目より三百目迄銀二分五厘乃至三分、三百目より五百目迄四分五厘許、五百目より八百目迄六分乃至七分、八百目より尅貫目迄八九分乃至尅匁なりし」とあり、また昭和三五年刊、横山重校訂「<sup>(2)</sup>好色一代女」に詳細な魚荷飛脚についての補注がある。本稿はこれらの先学の業績に基き京魚荷飛脚についてみるものである。

### 一 地誌にみえる魚荷飛脚

まず京都では延宝六年午霜月吉日刊「京雀跡追」<sup>(3)</sup>天に

魚にびきやく  
柳のば、にしき上ル丁  
同下ル丁しはやト云

とあり、延宝六年戊午八月吉祥日刊「懷中京江戸大坂名所町案内」<sup>(4)</sup>の京諸商人所付には前記「京雀跡追」と同一の記事がみられる。つぎに大坂では延宝七己未湯月下旬、水雲子序「<sup>(5)</sup>難波雀」には

京魚荷飛脚について（藤村）

## 京大坂通路魚荷飛脚宿

江戸堀竹や丁

久兵衛

権五郎殿前

長兵衛

高麗橋四間町

九郎兵衛

とみえ、その賃銀は第一表の通りであり、書状は片便と返事取、他に状箱と荷物を取扱、後者は重量により賃銀が定められている。そして「右賃銀極りなし大駄ハ如斯也」と説明が付いている。

なお延宝七歴五月序、難波隠士「難波雀跡追」<sup>(6)</sup>には前記の京大坂通路魚荷飛脚宿の人名に「権五郎殿前 弥右衛門、備後町一丁目 清右衛門」の兩人が増加している。

さらにこの「難波雀」を訂正増補した同類の書である延宝七己未林鐘中旬、難波隠士友月翁序「難波鶴」<sup>(7)</sup>には

京大坂通路魚荷飛脚宿

江戸堀竹や丁

久兵衛

権五郎殿前

長兵衛

同

弥右衛門

備後町一丁目

清右衛門

かうらい橋四間町

九郎兵衛

平ノ橋も西へ一丁半入南かわ

河内や与兵衛

第1表 延宝7年京大坂通路魚荷飛脚賃銀定表

書状通	片便10文	返事取15文
状箱	大小見合	
荷物重目	100~300目	0.25~0.3匁位
	300~500	0.4 ~0.5
	500~800	0.6 ~0.7
	800~1000余	0.8 ~1.0

第1図 魚荷持・飛脚図（「人倫訓蒙図彙」所収）



京魚荷飛脚について（藤村）

内 かつ町浜より半丁東南かわ 万や長右衛門

とあり、賃銀は第一表と同様である。ところで

魚荷持と飛脚について元禄三庚午載七月吉旦開板

「所作入人倫訓蒙図彙」三 作業部に  
由来入

魚荷持丹後、若狭より京に上るは負て来る、大

坂より西南の魚を、大坂につきしを京に上す

ハ、籠に入て夜通に走来る、澁山切なる事なり、

籠者つ四分にて幾籠も荷なり

飛脚江戸、大坂をはじめ所々への飛脚有て、所

をさためて通ふもあり、又何所成ともやとひ次

第に行もあり、江戸六日切荷物賃目二付六

匁、二駄負賃賃目二付三匁五分、伊勢へ同八分、

加賀へ同二匁、但冬ハ雪中ゆへ高下有、尾張へ

一匁五分、奈良へ五分、高野へ八分、紀伊へ一

匁也

とある。また同書には第一図の魚荷持、飛脚の図

が掲載されている。この記述には魚荷持は京都へ丹

ものであるから、京都の場合についての魚荷持と飛脚と考えてよいだろう。

そこで再び京都の魚荷飛脚に戻ると、「難波鶴」「京羽二重」を参考にして編輯されたといわれる元禄五歲壬申三月吉辰板「諸国買物調方記」<sup>(10)</sup>の京都江戸大坂三所一覽、諸工商人所付の「う 京之分」に

うを荷ひきやく 柳ノばゝにしき上しはや  
同下あふみや

とあり、「ひ 大坂之分」に

(飛脚宿)  
同 京うを荷 御れう づみや  
のまへ 弥右衛門

同 同所 長兵衛

同 江戸ほり 久兵衛

同 ういや町 吉兵衛

同 びんご町 清右衛門

同 ひらの町 与兵衛

同 舟こし町 長右衛門

として、賃銀は前記第一表と同様であるが、「右ハ上りだちん也、但し大躰かくのごとし、極めたる直段なし、下リハ直段やすし」とある。上り、下りで直段の異なる事と、金額は上り駄賃とした点は従来記るされていなかった事であるが、これは突然でなく「難波雀」でも同様だったと考えたい。

つぎに元禄七甲戌年五月日序、「京独案内手引集」<sup>(11)</sup>には

魚にびきやく 柳のばゝにしき上ル丁  
同下ル丁しはやト云

とあり「京雀跡追」と同様である。

また元禄一〇年、難波の東乃軒不洗子序「日本国花万葉記」卷第一之上<sup>(12)</sup>、山城の諸国飛脚宿に

同魚荷宿 (大坂) 塩や五郎右衛門柳ノはと錦上

近江や与兵衛同下町 伏見や三郎兵衛富小路蛸薬し上

とあり、同卷六之二<sup>(13)</sup>(摂州難波丸上巻)の大坂の諸国飛脚宿に

京魚荷宿 御霊前 弥右衛門 同町長兵衛 江戸堀久兵衛 かいや町吉兵衛 備後町清右衛門 平の町与兵衛

舟越町長右衛門

とあり、上り駄賃は第一表と同様である。これ迄みた地誌の内容は大略同じと考えてよからう。

延享四丁卯孟春、志田垣与助撰「改正<sup>(14)</sup>難波丸綱目」第四冊に

同魚荷飛脚 (京) 八百や町ニアリ

とあり、同書の延享五年三月版、寛延改正版、宝暦改正版、宝暦九年版はこれと同様である。つぎに安永六年丁酉

初夏、陰山三郎兵衛序「改正<sup>(15)</sup>難波丸綱目」第四冊に

京魚荷飛脚 北勘四郎丁 永楽や清右衛門

と記るされ、同書天明版、享和元年版もこれと同じである。元禄期に比較すると数の減少がめだっている。

## 二 文学にみえる魚荷飛脚

魚荷飛脚について具体的な史料をまだみていないので、近世の文学作品に現れた魚荷飛脚についてみる。  
まず貞享三丙寅歳林鐘中浣日、書林岡田三郎右衛門板「好色一代女」<sup>(16)</sup>卷三に

京魚荷飛脚について(藤村)

京から、銀借りにつかはせし文章おかしや、銀八拾目にさしつまり内証借にして、其代には朝夕念する、弘法大師の御作の如來を濟す迄預け置べし、うき世の恋はたがひ事さる女を久しくだました替りに、いやといはれぬ首尾になりて子を産うちの入目、是非に頼たてまつる平野屋伝左衛門様まいる、賀茂屋八兵衛より、此文の届賃此方にて十文魚荷に、相わたし申候との断はり書とある。これは料金払済の上での利用である。

つぎに実際に使用された例としては、慶長一三年生、元禄元年歿の河内国柏原村大文字屋七左衛門、後庄左衛門の三田浄久は、干鰯、油粕等の肥料商で、柏原船に従事し、荒蕪地の開拓にも従事した。また延宝七年には「河内鑑名所記」を刊行している。彼は古川定圃（稲熊七右衛門）の前句附を後援したが、この両者の書状は天和、貞享年間のものが多く三田家に残存しているといわれている。一二月二五日付、三田浄久老宛、大坂住、古河定圃書状には、冒頭に「魚荷便りニ令啓上候<sup>(17)</sup>」とある。大坂と柏原間にも魚荷飛脚があった事が知られる。これが前記の大坂の魚荷飛脚かは明らかでない。恐らく別個のものではあるまいか。

なお七月二三日付、定圃公宛、柏原浄久書状<sup>(18)</sup>には

一（前略）此度清書致、我等七月二日に持参申候、飛脚ニ遣し候へば、ちん出申候へば笑止に存、我等持参申候（後略）

一先日ハさいく状進し候へ共、此方ノ人に持セ遣、銭ノいらぬやうニ致申候

一此度ノ巻飛脚ちん、此方からやり可申候間、早く片時もく急御持越待申候、方々の衆も今時分隙ニ見たがり被申候

とあり、飛脚賃が意識されていた事と、高値である事を示している。この飛脚も魚荷かは明らかでない。京魚荷と

は、はなれるが記るしておく。

再び文学作品に戻ると、元禄五申歲初春、難波西鶴序「世間胸算用」<sup>(19)</sup>卷三の四「神さへ御目違ひ」に、  
よきくらしの人さへかくあればまして身体かるき家／＼はそろばん枕に寝た間ものびちよみの大節季を忘るゝ事  
もなく台碓の赤米を栴の秋と詠め目のまへの桜鯛は見たかる京の者に見せよと毎夜魚荷にのぼし客なしには江鰯  
も土くさいとて買ぬ所ぞかし。

とある。これは魚荷が瀬戸内海から京都に毎夜鯛を運ぶ場合であるが、飛脚の業務にはふれていない。

また元禄一五年九月一五日序、夜食時分「好色敗毒散」<sup>(20)</sup>卷之四、第二枕槍に、勞咳養生のため京にのぼり、全快後  
島原の揚屋丸田新兵衛に遊び、今は大坂に帰り新町で女郎遊びを始めた主人公について

なよ竹の伏見より夜舟にて下りはすれど、都に残る心魂、たくはまたの病氣もきのどくなり、何とぞこの事忘れ  
るやうにと方便のよね狂ひ、金吾の君に受領して、なるれば移る色なるや、「京の御状御返事」と、魚荷がせが  
めども、いかなく、「丸太屋新兵衛にすつとせい」とばかりなり

とあり、京から大坂に返事取の魚荷飛脚が使用され、女郎が恐らく厭々利用したのであろう。

さらに享保三年正月二日序、一洞「寛濶大臣氣質」<sup>(21)</sup>二之卷の「金を吸出す膏藥大臣」に都の東辺より毎日膏藥を売  
に廻る男が

ある時若い衆に頼まれ、島原への状一通持て参りけるに、賃は卸の並として五分くれられたり、大阪より十里の  
所を魚荷籠とづかり来さへ、文一ツを銭十文にさだめ置しに、島原は近き里なるに是は好い事と思ひつぎて、そ  
れより町中の忍び文を遺練して、其後は隣町の用ども聞て、

と、大坂、京都間の魚荷飛脚賃が書状一通一〇文であり、都の内の文使の状賃と比較されている。



また宝曆二壬申初春序、南圭梅翁「世間母親容氣」<sup>(22)</sup>卷之五、第三「思ひく心は互に乗合船」に  
後の方に頰冠せし五十ばかりの男、我独の憂身と思ひしに、世には似たる事もあるもの哉、私は神崎近き食満と  
いふ在所の者代々家蔵田畑多く、二十三人暮らせし百姓、不図大坂の米市にかゝり、一年計りはして取りしが、  
買へば下る売れば上る、田畑書入れて銀とし、損を埋めんとする程不廻り、家も売り娘も二人女郎に出し、又其  
の銀でかゝつて見しに、今年は唐黍の根が北へさしたれば、風年と考へ身上限り買ひし所に、西国近年の豊年に  
て、ばたくと下りを受け、水も飲まれぬ身の果、京へ魚の徒足荷に備はれ、すうく言ふての駄賃暮らし、故  
郷へは近けれども、面目なくて顔けならずと、涙を隠す物語り、

とある。大坂近郊の村方地主が米相場で財産を失ない離村して日雇に転落し、京魚荷になった物語である。実は奈  
良の母親が子供に聞かせるために、伏見の辻立の駕の者に金一匁を遣わして、出入の者の指図により同船させての「言  
含めし昔語り」であるが、魚荷持の社会階層を示しているが、これも飛脚の業務にはふれていない。

さて明和二年正月刊、二世八文字屋自笑「禁短氣三編」<sup>(23)</sup>卷之五、第四「魚荷も義と情を荷ふ老心」には、  
かくれたるよりあらはれたるは梨木町辺に、借宅して身の難をのがれんとする梅永大蔵、大坂にて出入のさかな  
や堺の小市といふものをかたらひ、本宅よりの通路小市は錦のたなへ肴になひこむつゝでに、状を取つぎ用を達  
しけるが大蔵方より大坂妾のもとへ返書をうけとり、つれ立し者共とはおくれしまゝ今いせ船にのりはずさじ  
と、鳥羽道へ急ぐ所に秋山の辺にて、文蔵殿、八郎左衛門、戸大夫に行あひ、外は見しらぬ共心の鬼にて戸大夫  
に見られまじと、道をかけぬるよりかへつてふ審たち、まてと声をかけられ常にとなりと身が方へ心やすく、さ  
かなをいるゝ其方が身共を見ていやがる心ね、がてんがゆかずと二言ともなく三人かゝり打たをし、くはいちう  
を見れば大蔵かへな忍山とありて、手跡も人だのみなれば証拠にならぬ共文ていまがふ所なく、なにとやらん取

また心もとなきゆへ近日鎌倉へ立のくべしとの義、あて名おかる殿とは妾の名なれば、(後略)とある。大坂から京に魚荷があり、書状を取扱い、返事も貰っている。魚荷が集団で行動している事がわかる。

### 三 丹後国田辺の京通ひ——結びにかえて——

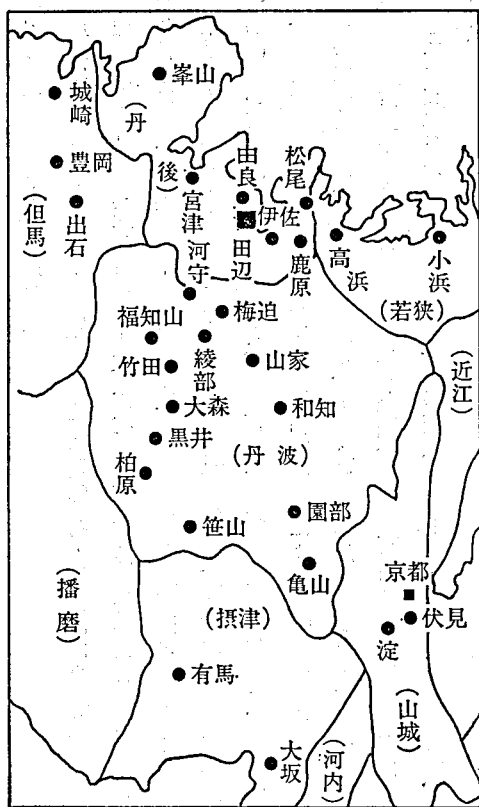
以上大坂から京に上る京魚荷飛脚についてみてきた。いずれも断片的な史料である。前記の通り「人倫訓蒙図彙」には魚荷持は丹後、若狭にもあると記るされている。丹後の場合について、瀬戸美秋「京通ひ」について——田辺藩陸運史の一駒——<sup>(24)</sup>により考えたい。

瀬戸氏によると、弘化四年、丹後国田辺(舞鶴)藩の触書には京通ひの起源について「前々より仲買より出候魚荷を持通ひ候もの共、京通ひ日雇と相立来候」とあり、魚荷持が通日雇を営んだ事を記している。

通ひ日雇について延享二年一月に藩の定書が作成され、同年に京通ひの日傭持の者は日傭頭久右衛門支配に属し、京都止宿は丹後屋五兵衛と指定された。日傭頭の口銭は、田辺から京都迄の御用荷物、その他の諸荷物、町方登せ荷物について、(一)時廻御飛脚一人、(二)二日着御飛脚一人(但六貫匁)、(三)御供附八貫匁一人、(四)御荷物一〇貫匁一人は、一人前一〇文宛で、上貫目の場合は前記の割合による。(五)駄継一枚につき三〇文、(六)日雇賃を取り持出した魚荷物、その他の荷物は一荷につき一〇文、(七)自身運搬の魚荷及びその他の荷物は一荷につき五文の口銭である。これには「京通ひ賃持不仕者、自身之商物持登候類、魚荷之外口銭取不申候」と但書がある。

つぎに近在に日傭を出す場合には、若狭国小浜が七文、丹後国宮津が五文、丹波国梅柏が三文、地廻が三文の口銭である。

第2図 田辺松葉屋関係図



この京通ひは飛脚屋、通日雇、魚荷飛脚を兼ねた経営と考えられる。

京都から田辺に下る荷物口銭は  
前記丹後屋五兵衛が取扱い、前述  
の(一)～(四)は一人前八文宛で但書は  
変らない。そして(1)諸方から集め  
た荷物の口銭は五貫匁造は五錢  
宛、それ以上は八錢宛、(2)すべて  
軽目の物と魚物類は質銀に応じ上  
記の割合の口銭である。(3)田辺か

京での買物の荷物は、丹後屋宅に入れるから庭銭を亭荷につき四文宛、但し荷物の軽重により、金額を見計らう事になっている。このような口銭の規定は丹後屋も日傭頭、人宿的な性格であつた事を推測させる。

つぎに田辺藩東郡奉行下役秋田宇右衛門道典「旧藩牧野家郡役所年中行事其外諸記録」<sup>(25)</sup>に、延享二年二月付で松葉屋久右衛門は御奉行に宛て次の通り申上げている。内容は日傭頭の経営についてである。

まず「御定日雇賃之覺」は、殿様御上下について日用一人につき一三匁五分、頭二人を下される事としており、つぎに田辺を中心に京坂、城崎、有馬、地廻り、丹後、若狹、その他の第二回に示した地域への賃銀は第二・三表の通

25

りて、前者は伏見の項の次に左記の但書がある。

京都迄御用并御家中魚荷物疋貫匁ニ付疋匁三分五厘、荷物拾貫匁迄、御供ニ而六貫匁持

これは魚持が田辺から京都に動いている事実を示している。つぎに第三表は田辺周辺での日用賃を示している。京都から田辺への下り荷物の賃銀は第四表の通りである。そしてこの金額を認可の上は、町在共に相対で賃銀を決定しない事を定めている。特に第四表の場合、その内容からみてこの松葉屋は、参勤交代の通日雇請負の可能性が考えられる。

またこの外に書状を田辺から京都御屋敷へ持参の場合には、御用、御家中共に賃銀は受取らず、京都から田辺へも

第2表 延享2年丹後国田辺御定日雇賃表

	駕籠2人 匁	荷持 匁	駕上下2人 匁
丹波国山家	6.45	3.00	
須知	13.50		
園部	15.45		
亀山	19.90		
山城国京都	27.00		
淀	27.00		
伏見	27.00		
摂津国大坂	40.05		
丹後国宮津	7.80	3.30	12.00
峰山	14.45		
但馬国出石	19.50		
豊岡	23.25		
城崎	27.00		
丹後国河守	7.80	3.30	12.00
丹波国福知山	10.35		
竹田	12.90		
大森	15.45		
黒井	15.45		
柏原	18.15		
笹山	20.70		
摂津国有馬	32.10		
丹波国綾部	6.45	3.00	
丹後国伊佐村	9.00		
若狭国高浜	7.80		
小浜	15.45		

第3表 延享2年田辺周辺賃銀表

	1人=付	上下	御乗物
地日用	1.65匁		
地廻り	1.65		
同天台寺郷		2人1.80匁	3人2.70匁
同見樹寺郷		1.20	1.80
同見樹寺郷	2.10	1人3.55	
丹後国鹿原	2.55	3.75	
松尾	2.70	3.15	
由良			

第4表 延享2年京都<sub>ゝ</sub>田辺宛賃銀表

	賃銀
下り駕1人	10.50匁
時廻し御飛脚1人	10.50
御供日用6貫	10.50
2日着御飛脚荷物6貫	6.75
下り荷物1貫目	0.90
空乗物1挺(3~4貫目荷物入2人)	14.55
同上小揚賃(荷物多入)	2.25
差合物2人(15~6貫目)	14.70
同上(18~20)	19.95
同上(25~30)	29.25
器物諸事軽目1荷持	7.20
軽目差合物2人	14.70
長持屏風箱2人(15~6貫目)	14.70
同上(~20)	19.55
空長持2人	9.90
箆筒類1人持	9.15
衣衾1貫匁	0.90
畳2枚持2人	14.70
鍵長1丈	1.05
同上長2間	1.50
弓1挺	0.67

第5表 延享2年田辺<sub>ゝ</sub>京都御屋敷迄賃銀表

	賃銀
刀1腰箱入紙包共(御屋敷迄)	1.50匁
同上(竹屋利兵衛, 柳屋久右衛門方迄)	1.65
脇差1腰(御屋敷迄)	0.90
同上(竹屋, 柳屋方迄)	1.05
御荷物10貫目持1人	13.50
九尺鍵1筋	2.25
弓1張	0.97

同様としているのは、日傭頭の一種の冥加であろう。ただ京都での届ける道法が遠い場合には賃銀を求めている。なお京都へ二日着御定が、三日着などの際には増分を要求しない。近国からの戻り荷物は京都からの戻り賃銀の割合で金額を定める事になっている。

最後に田辺から京都御屋敷迄の賃銀は第五表の通りであり、内容は一般の武家荷物である。御荷物が多い場合には一〇貫目の賃銀の割合で勘案する。表以外に指合御荷物貫匁一六貫目迄は日用二人としている。これらの点から松葉屋久右衛門の日傭頭は、福岡日雇支配<sup>(26)</sup>と類似したものと考えられる。

再び瀬戸氏によると、弘化四年の触書には

近頃は登リ之魚荷仲買共へ申談買請、自分之荷物ニ致持登リ迎、印札上ヶ切候者追々ニ相増、此節ニ而者不殘右

様ニ致成し、京通ひ日雇者人も無之由ニ而御用筋并諸向差支候

とある由で、これは魚荷持が口銭除れをしている事実を示し、同年の日傭人足一五〇人の内で在が一二〇人、町が三〇人であり、八割は農村にいる事がわかる。

さて以上の事からすれば、大坂からの京魚荷飛脚も矢張り魚荷持として日雇の性格を持ち、人宿的な統制があったと考えるべきであろう。これが田辺のようにならなかったのは、京、大坂の大都市には飛脚問屋、人宿が別個に存在し、その余地がなかったからであろう。そして全国各地の魚荷持の場合にも、これが飛脚を兼ねる可能性はあったと考えたい。<sup>(27)</sup>

註

(1) 「大阪市史」第一 三九五頁

(2) 井原西鶴作「好色一代女」(岩波文庫) 二二〇頁、補注 二一

(3) 野間光辰編「新修京都叢書」一巻二九〇頁

(4) 国立国会図書館蔵、延宝六年刊「三都雀」(三冊本) 上

による。同書の原題簽は失なわれ、現在のものは後筆である。原表紙の上に図書館で付した表紙があり、その裏に

ペン書で「懷中京江戸大坂町名所町案内原題簽天理本ニアリ」とある。「大東急記念文庫書目」三二二頁に「京

江戸名所町案内」延宝六刊(京都堺屋庄兵衛)一冊とあり、この一冊本には矢張り原題簽はなく、「都名所独案内記」と後筆されている。内容は前記三都雀と同一であるので、表

京魚荷飛脚について(藤村)

記の書名で記した。なお三都雀については、和田万吉著、朝倉治彦増補「新訂増補古版地誌解題」一六―七頁参照。

「京雀跡追」と同様のものとしては、この他に延宝七己未年孟春初吉辰、伊丹屋吉右衛門板「都ひとり案内」巻一(横山重監修「近世文学資料類從 古版地誌編4 京雀」三五七頁)に

魚にひきやく 柳のばゝにしき上ル町同下町しはやト云とある。

(5) 昭和四四年、前田勝雄発行、複刻版「懷中難波すゝめ」

(6) 慶応義塾図書館蔵

(7) 大東急記念文庫蔵、なお慶応義塾大学国文学研究会編「国文学論叢第一輯 西鶴 研究と資料」二二―三頁所収の檜谷昭彦、伊藤哲夫、福島行一「資料翻刻 難波鶴」参照

- (8) 大正九年一〇月、山田編、稀書複製会本、なお正宗教夫編訂「日本古典全集」第三期七卷一二三頁参照
- (9) 「日本古典全集」第三期七卷一二八頁
- (10) 花咲一男編「諸国買物調方記江戸十組問屋便覧」八二、九九頁
- (11) 「新修京都叢書」三卷三七頁
- (12) 朝倉治彦監修「和国花万葉記」(古版地誌叢書)一卷七五頁
- (13) 「同右」二卷一七八頁
- (14) 多治比郁夫、日野龍夫編輯「校本難波丸綱目」一七八頁
- (15) 「同右」五二五頁
- (16) 暉峻康隆校訂「定本西鶴全集」二卷二九三頁
- (17) 平林治徳編著「三田浄久」四六、一四五―七七頁
- (18) 「同右」一一七頁
- (19) 暉峻康隆校訂「定本西鶴全集」七卷二四七頁
- (20) 長谷川強校注「仮名草子集 浮世草子集」(日本古典文学全集37)四二〇頁
- (21) 博文館編輯局校訂「校訂統氣質全集」(帝國文庫四拾篇)一八七頁
- (22) 博文館編輯局校訂「校訂氣質全集」(帝國文庫三拾篇)七四―五頁
- (23) 博文館編輯局校訂「校訂珍本全集 下」(帝國文庫三拾參編)八九七頁
- (24) 舞鶴地方史研究一九・二〇合併号二四一七頁、なお瀬戸美秋「田辺藩の『京通い』」河丹地方史二四号は大略同内容である。
- (25) 瀬戸美秋氏からコピーを恵与された。記して感謝したい
- (26) 拙稿「福岡日雇支配・大坂通日雇万屋喜平次について」史料館研究紀要八号参照
- (27) 阿部謹也「中世を旅する人びと」一四六頁によると、ヨーロッパ中世には肉屋は定期的に近隣の農村を馬で廻り、家畜の買付を行なうので、都市間の郵便物の配達をしばしば委託され、事実上なかば公的な郵便業務を請負ってさえた云う。現在のドイツ連邦郵便のマークとなっている喇叭は、はじめ肉屋が到着と出発の合図に鳴らしたのになむとしている。これも定期的な食糧の運搬と通信業務が結びついた例だろう。

付記 本稿の作成について、国立史料館、国文学研究資料館、国立国会図書館、慶応義塾図書館、大東急記念文庫は所蔵史料、図書の利用を許可された。瀬戸美秋氏には史料コピーを恵与された。また小野尚志、永田治樹、歌野博、中村スミ子の諸氏のお世話になった。記して感謝したい。

